

# 分科会 I 提案事項

## 中 学 校

第1分科会	カリキュラム・マネジメントの推進 ～教科横断的な視点を含めた、教育課程の編成・実施・評価・改善の在り方～ …	83
第2分科会	主体的・対話的で深い学びの実現……………	87
第3分科会	よりよく生きるための道徳性の育成と健康で安全な生活を 実現するための教育の充実……………	91
第4分科会	自己理解を促し、将来にわたって人としての生き方を深める 生徒指導とキャリア教育の充実……………	95
第5分科会	多様化した教育課題に対応できる学校経営と教員の育成……………	99
第6分科会	地域や専門機関との連携・協働による「チーム学校」の実現と その機能強化……………	103

## 第1分科会

## 研究主題

カリキュラム・マネジメントの推進  
～教科横断的な視点を含めた、教育課程の編成・  
実施・評価・改善の在り方～

提 案 者：大 濱 用 四 郎（西 表 中 学 校）  
司 会 者：北 田 憲 司（黒 島 中 学 校）  
記 録 者：岡 崎 心 一（竹 富 中 学 校）  
”：美 差 淳 司（小 浜 中 学 校）  
運 営 委 員：新 城 基 之（金 武 中 学 校）

## 1 はじめに

学習指導要領の前文に「よりよい学校教育を通しよりよい社会を創る」という理念がある。それぞれの学校が学びの意義や身に付ける資質・能力を明確にしながら社会との連携及び協働によりその実現を図っていくという、社会に開かれた教育課程の実現が重要となる。また、児童生徒が将来において、多様な人々と協働しながら様々な社会変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き持続可能な社会の創り手となることが求められている。

各学校においては校長の方針の下、各学校の特色を生かした教育課程を編成し、その基本的な方針を家庭や地域と共有しながら実施、改善していくカリキュラムマネジメントに努めなければならない。

## 2 主題設定の理由

竹富町には、小中併置校7校、小学校4校、中学校2校が設置され、本研究員の勤務校は竹富町内の離島僻地にあり、複式学級を編成する極小規模校である。各島それぞれ地域行事が盛んで学校と地域との関わりも密接である。また、竹富町は令和元年度から町内の全学校において海洋教育を推進しており、その取組においても地域社会との関わりによるものが大きい。そこでその海洋教育を含め、各学校の実態に応じた特色ある教育課程を編成・実践し、まとめることで研究主題に迫ることとした。

## 3 研究の視点

- (1) 学校のカリキュラム・マネジメントの実践及び教育活動の活性化
- (2) 学校教育の改善・充実に向けた、社会に開かれた教育課程の実践
- (3) 教科横断的な視点を含めた教育課程のPDCAの在り方

## 4 研究の実際

## ■竹富町立小浜小中学校（児童41名、生徒21名）

## (1) はじめに

本校が所在する小浜島は、石垣島から船で約30分の場所にあり、色濃く八重山の昔ながらの風習が漂い、今でも数々の伝統行事が行われている。特に国の「重要無形文化財」にも指定されている「結願祭

（五穀豊穡を祈り芸能を神に捧げる祭り）は、島の行事の中でも盛大に行われる祭祀の一つで、若い世代へと脈々と伝承され続けている。島民は、暮らしや様々な営みの中で海洋と密接にかかわり、多大な恩恵を受けながら、先人たちから受け継いだ豊かな知識や技術を活用して生活し続けている。

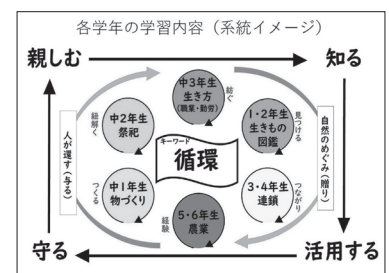
## (2) 海洋教育の推進

本校は、地域と連携しながら周囲を取り巻く海洋や自然環境、伝統行事等を扱った多種多様な子ども達の学びを計画・実践している。現行学習指導要領にも「持続可能な社会の創り手」の育成が求められており、本校においては、海洋教育の実施がその大きな推進力となると考えている。本校の海洋教育のテーマは「美しい小浜を守ろう ～より豊かな海へ～」と設定し、児童生徒の発達段階に応じた取組を、生活科や総合的な学習の時間を中心として、生きる力を育みながら海洋教育を推進している。

## (3) 教科横断的な視点を含めた教育課程のPDCAの在り方

## ① 連続した学びの意識化

学年の発達段階に応じた教育活動を通して、キャリア教育とも関連付けながら、次学年へつなげている。これらの一連した学び（キーワード：循環）には、小浜島の豊かな自然の恩恵を受けるだけではなく、人として自然にも何かしら還していくという考えを持って欲しいという願いも込められている。



【図1 各学年の学習内容】

## ② 教育課程の実施における教科横断的な視点

本校では、海洋教育を教科横断的な視点で取り組むために、全学年で「海洋教育として取り組める単元一覧」を作成し、教職員の意識化を図っている。

教科等学習を通して、「自分と海のかかわり方について問い続ける子」を目指し、教育活動を実践している。

海洋教育として取り組める単元一覧

※特の単元は、積極的実施、お願します。

学年	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
◎小学生	学校行事 もぐり採り	ハーリー祭	海洋月間	海洋月間	海洋月間	海洋月間	海洋月間	海洋月間	海洋月間	海洋月間	海洋月間	海洋月間
◎中学生	学校行事 もぐり採り	ハーリー祭	海洋月間	海洋月間	海洋月間	海洋月間	海洋月間	海洋月間	海洋月間	海洋月間	海洋月間	海洋月間

【図2 海洋教育として取り組める単元一覧】

③ 評価・改善の在り方

珊瑚学習や防災教育、ハーリー祭、シュノーケリング体験、もぐり採り体験、祭祀との関わり、稲作体験等の体験的な活動を行う際には、その目的を教職員で共通理解を図り、実施後の振り返りを通して、「自分と海のかかわり方について問い続ける子」が育成されているかを検証していく。

また教科等指導の中で、海との関わりに関連がある新たな単元を見いだしたり、掲示物の効果的な活用方法を模索したりするなど、全校体制で海洋教育の取組の意識化を図っていく。

(4) 校長の関わりとリーダーシップ

学校デザイングラフィックオーガナイザーを作成し、本校で取り組むべき教育活動の視点を明確化している。また、本校の教育目標の視点である「自立・共生」を全職員が意識しながら実践できるよう教育活動を推進している。子ども達が島の良さを発見することだけでなく、島の生活と海洋とのつながりが、これまでの自分の生活とこれからの自分の未来に関係していることを自覚し、彼らが小浜島の持続可能な未来の創り手となることを意識して実践している。

■竹富町立西表小中学校（児童12名、生徒14名）

(1) はじめに

本校は、西表島西部の祖納・干立・白浜（中学校）の集落を校区とし、祖納地域に位置している。古来より西表島の行政・産業・文化の中心地であった。今でも稲作文化が色濃く残り、「豊年祭」「節祭」等の祭祀が年中厳かに執り行われている。また、本校の三大体験学習である「海の体験：サバニ乗船・ダイビング等・刺し網漁」「稲作」「和紙づくり」は、「ふるさと学習」として、地域や保護者の協力を得て一部は40年以上続いており、保護者や地域住民は学校教育のみならず、体験学習への関心も高く、地域の次代を担う人材育成への期待は大きい。

(2) 教科横断的な視点を含めた教育課程のPDCAの在り方

① 教科横断的な視点

- ア 総合的な学習の時間を核としたカリキュラム作成と体験学習のマニュアル化
- イ 目指す資質・能力の明確化
- ウ 小学生から中学生まで発達段階に応じた学習内容や目標の設定

② 編成・実施・評価・改善の在り方

- ア 持続可能な取組かどうか
- イ ねらいが明確か(何を身に付けさせたいのか)
- ウ 子どもの主体性が発揮できる活動かどうか
- エ 学んだことが社会と繋がっているかどうか

(3) 実践例

① 海洋教育に関する取組

- ア 海神祭への参加（小・中）
- イ 海の体験学習：サバニ体験・ダイビング、シュノーケリング体験・刺し網漁体験（小・中）
- ウ 地震・津波避難訓練（小・中）
- エ ビーチクリーン（小・中）
- オ やまねこ学習（小）

「海の体験学習」は、サバニ体験・刺し網漁体験・シュノーケリング、ダイビング体験を3年サイクルで実施している。小中合同で行うこの体験活動を中心に、それぞれ教科横断的なカリキュラムを作成し、全体での学習と学年ごとの探究学習を進め、地域の一員として今できることや未来に行動する力を育む。令和5年度は、昨年度の成果と課題を整理した年間カリキュラムを基に、各学部が設定したテーマに沿って取組を進めている。

「海と人々の暮らし」(小)

「きれいな海を守り未来へ繋いでいくために」

(中)

令和5年度 西表小中学校 「海洋教育」 年間カリキュラム(教科横断Ver)												～きれいな海を守り～																			
<p>1 実践のねらい</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・海の自然や人の関わりについて関心を持ち、地域の海を知り、浜人や海を守ろうとする意識や暮らしとの繋がりを考える機会を作る。</li> <li>・地域教育資源を活用した海洋教育を通して、西表に住む人々が海洋とどのように関わり、どのような恵みを受けているか理解を深めることで生徒の「課題探究能力」「表現力」を育成する。</li> </ul>												A領域：問題																			
<p>2 年間指導計画</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>4月</th> <th>5月</th> <th>6月</th> <th>7月</th> <th>8月</th> <th>9月</th> <th>10月</th> <th>11月</th> <th>12月</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>サバニ体験</td> <td>白浜海神祭</td> <td>稲作体験</td> <td>修学旅行</td> <td>節祭</td> <td>ビーチクリーン</td> <td>和紙作り</td> <td></td> <td></td> </tr> </tbody> </table>												4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	サバニ体験	白浜海神祭	稲作体験	修学旅行	節祭	ビーチクリーン	和紙作り			1 海の自然と人の関わり	2 ゴミの削減と分別
4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月																							
サバニ体験	白浜海神祭	稲作体験	修学旅行	節祭	ビーチクリーン	和紙作り																									
<p>各教科で学習したことをまとめる</p>												3 海水温の上昇	1 2																		
<p>各教科で学習したことをまとめる</p>												4 言葉づき	2 *																		
<p>各教科で学習したことをまとめる</p>												5 サンゴの自然環境																			
<p>各教科で学習したことをまとめる</p>												6 海の環境について																			

【図3 令和5年度 年間カリキュラム(中学校)】

## ② 地域連携（文化継承・歴史伝聞）に係る取組

- ア 平和学習（小・中）
- イ 稲作体験学習（小・中）
- ウ 和紙作り（小・中）
- エ 節祭（シチ）への参加（小・中）

中学部の平和学習は今年度、集落で起こった戦争のことを地域の年配者に聞き取りし、足もとの戦争について知る貴重な機会となった。稲作体験は種籾から稲刈りまで、米作りの一連の流れを体験するだけでなく、餅つきや米販売に向けた取組も行い、年度を跨いだ約6カ月間に渡る学習。発達段階に応じたねらいをもとに取り組んでいる。和紙作りは、地域在住の方を講師に、原木となるアオガビの採取から始めている。小6と中3は全工程を体験する。実施においては自作のテキストを用い、総合的な学習の時間を中心に、他教科も関連させて進めている。



## (4) 校長の関わりとリーダーシップ

- ① 学校経営方針・指導の重点及び学校グランドデザインの周知と推進（PTA総会・校長だより等）
- ② 教職員及び児童生徒と身に付けさせたい資質・能力の共有化（校長講話、集会等）
- ③ 学校評価や各教育活動後の振り返り等を通したPDCAサイクルの推進と助言

## ■竹富町立黒島小中学校（児童13名、生徒6名）

## (1) はじめに

本校は黒島の中央部に位置し、児童・生徒19名の一島一校の小・中学校併置校である。島の人口は200人程度で、地域の基幹産業は畜産業である。その他、民宿やカフェ・ダイビング等の観光業が多い。地域と学校との結びつきは強く、学校行事や地域行事で交流し合い関わり合いながら、共に「島の宝」である子ども達のために協働しながらその育成を支援しようという思いに溢れている。

## (2) 教科横断的な視点を含めた教育課程のPDCAの在り方

学校教育目標の実現に向けて、学校グランドデザインの共通理解を図り、社会に開かれた教育課程を編成・実施・評価・改善するサイクルを確立していく取り組みを行う。

## ① 教科横断的な視点

- ア 身につけさせたい力を明確にし、各教科に位置づける。
- イ 多教科にわたり総合的に応用する力を身につけさせるために編成する。
- ウ 子どもと地域の実態に基づき編成する。

## ② 編成・実施・評価・改善のあり方

- ア 教師と子どもが一体となった「チーム」として機能するように計画・実践を行う。
- イ 子どもが主体的に活動する取組になっているかを評価する
- ウ 社会や地域とのつながりを意識させた取組になっているかを評価する。
- エ 短い期間で検証し、都度改善していく。

## (3) 実践例

## ① 地域連携、交流学习の取組

- ア 保護者と共に学ぶ道徳（ICTの活用）
- イ 社会科見学（石垣島気象台・発電所・役場）
- ウ 職場体験学習（黒島及び石垣市内事業所等）
- エ オンラインでの他校との英会話交流
- オ 交流学习（石垣市内大規模校）
- カ 豊年祭・牛祭りなど地域行事への参加
- キ 「奇跡の芋」みやなご（宮農7号）収穫

## ② 海洋教育の取組（総合的な学習の時間等を含む）

- R 3年度（小中共通テーマ＝「サンゴ」）
  - ア 「サンゴと黒島の生活」講話（小）
  - イ 「ウミガメ・島の自然環境」講話（小・中）
  - ウ サンゴ染め、シュノーケリング体験（小・中）
  - エ サンゴランプシェード作り（中）
- R 4年度（起業教育＝海洋プラゴミを活用したアクセサリー等を生産・販売）
  - ア 漂着物活用アート作品づくり（中）
  - イ 海洋プラ商品の生産・販売事業（小・中）
  - ウ アーサ採り体験（学校行事、学力向上対策）
  - エ ビーチクリーン〔伊古海岸〕（小・中）
- R 5年度（小中共通テーマ＝塩「まーす」）
  - ア 「ぬちまーす」高安社長の講話（小・中）
  - イ 「石垣の塩」工場見学・塩づくり体験（中）
  - ウ 黒島の海水を使つての塩づくり
    - つくった塩をどうするか活動については、今後児童生徒達と話し合い決めていく予定

## ③ 地域の芸能・文化の継承に向けた取組

- ア 豊年祭奉納五穀栽培、地域行事への参加
- イ 三線・棒術・舞踊の学習
  - 運動会、学習発表会、中文祭舞台発表、
  - 「黒島節」、「黒島口説」、「棒術」等

## (4) 校長の関わりとリーダーシップ

- ① 学校教育目標・グランドデザインに基づく目指す児童生徒像を意識した教育活動の推進（学校だ

よりで発信、HP掲載、教頭・教務との連携)

- ② PTAと連携した学校行事、人材活用の推進
- ③ 学校評価、各種テスト・調査、教育活動等のPDCAサイクルを意識した活動の推進



■竹富町立竹富小中学校（児童25名、生徒8名）

(1) はじめに

本校は、竹富島の3集落の中央に移置する小中併置の極小規模校である。竹富島の主な産業は観光業で、年間約60万人が訪れる。また国指定の重要無形民俗文化財の種子取祭を始めとする地域行事が盛んで、島民は年中行事を軸に生活を営んでおり、児童生徒も伝統文化に対する思いや郷土愛が強い。

(2) 教科横断的な視点を含めた教育課程のPDCAの在り方

本校の特色である海洋教育について、主に総合的な学習を軸として道徳、特活、各教科を関連づけた教育課程を編成する。各教科間の関連をおさえて指導できるよう各学年で教科横断的なカリキュラムの年間指導計画を作成し実践している。適宜振り返りを行うことで課題を明確にし、教育課程の改善を行っている。

(3) 実践例

① 主な海洋教育の取組

学年ごとの海洋教育目標を設定し全体活動と個人テーマの探求学習を合わせた取組を行う。小学校低学年では地域の自然や伝統文化との触れ合いを通して地域の良さに気づき、中学年ではその気づきをもとに課題解決に向けて学んだことをまとめる。高学年では探求活動を通して身に付けた知識・技能を実生活に役立てる。中学校においては、学びを活用し、よりよい生活のために行動したり他者と情報共有することを目指す。今年度はSDGsをさらに意識しエシカルツアーガイドを行い発信していく。

全ての学年で学習デザインを作成し、事前学習、探究活動、事後学習、未来のための力・行動へとつなげ「持続可能な社会の創り手」の育成を目指す。

- ア 海の子集会（もずく・アーサ採り）
- イ 春の遠足（環境に良い商品開発事前学習）
- ウ シュノーケリング・スキューバ体験
- エ ゴミ焼却場見学、ビーチクリーン活動
- オ 珊瑚マップづくりとエコガイド活動

② 種子取祭の取組

ア 事前学習

- (ア) 由布島での稲作講話（地域人材）
- (イ) 神司に学ぶ御獄めぐり
- (ウ) 芋・粟・ごま・大豆栽培とイーヤチ作り



イ 学びの発信と事後指導

- (ア) オンライン学習会の定期開催
- (イ) 総合的な学習発表会のプレゼンテーション
- (ウ) 個人テーマの探求学習
- (エ) キャリア教育との関連事前事後指導での「かふやみ」メタ認知

③ 方言の継承

- ア てーどうんむに（竹富方言）による朝の放送
- イ てーどうんむに大会

(4) 校長の関わりとリーダーシップ

- ① PDCAサイクルの確立と助言
- ② 学校経営方針や指導の重点との関連、活動のねらいや目指す児童生徒像の明確化
- ③ 学校だよりによる家庭・地域への情報発信と共有、協働意識の向上
- ④ 地域人材(素材)バンクの作成と海洋教育サポーターの配置

5 まとめ（全体の成果と課題）

【成果】

- (1) 本地区のそれぞれの地域や学校の実態に応じた特色ある教育課程を編成し、小中連携して共通実践することができた。
- (2) 家庭や地域と連携し、各教育活動で地域人材や地域資源を有効に活用し、取組を進めることができた。
- (3) 教科横断的な視点を含めた教育課程を編成し実践する中で、職員間の協働体制を確立し、評価・改善に向けてのサイクルを展開することができた。

【課題】

海洋教育に関する教科等横断的な視点を取入れた持続可能で実効性のあるカリキュラム・マネジメントを構築し、適宜見直しを図る必要がある。

## 第2分科会

## 研究主題

主体的・対話的で深い学びの実現

## 1 はじめに

急激に変化し、予測困難な社会を切り拓いていくために未知の状況においても主体的に考え、他と協働しよりよく問題を解決する力が求められる。学習指導要領では、学校教育において児童生徒に育成を目指す資質・能力を3つの柱に整理している。その資質・能力を児童生徒一人一人にしっかりと育むため、「主体的・対話的で深い学び」の視点で授業改善を推進しなければならない。

## 2 主題設定の理由

授業において育成すべき資質・能力は、幼・小・中・高と全教科等において明確にされている。各学校においては児童・生徒に育成したい力を意識しながら工夫して教育活動に取り組んでいる。本研究部会では、昨年度に引き続き、共同研究者が自校の成果と課題をもとにした具体的な取組を紹介することで研究を推進した。

## 3 研究の視点

主体的・対話的で深い学びの授業実践に向かう各校の工夫や体制づくりについて、各校とも校内研修のテーマを設定して実践を積み重ねている。各学校の研究テーマは以下の内容である。

糸満市立糸満中学校
『確かな学力を身につけ、主体的に学び合い高め合う生徒の育成』 ～主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を通して～
糸満市立潮平中学校
『主体的・対話的で深い学びの視点に基づく授業改善の構築』～学びの自立に向けた学習指導を通して～
栗国村立栗国小中学校
『主体的に学び、豊かに表現する力を身につけた児童・生徒の育成』～「課題解決力」を育成する授業の実践を通して～
座間味村立慶留間小中学校
『主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善』～「身につけさせたい力」を明確にした学習指導の工夫～
南城市立佐敷中学校
『生徒指導の4つのポイントを意識した教育活動の実践』～学びの質を高める授業づくりを通して～

提案者	：平良正哉	（佐敷中学校）
司会者	：平伸健	（栗国中学校）
”	：宮里安英	（慶留間中学校）
記録者	：宜保博哉	（潮平中学校）
”	：大城直之	（糸満中学校）
運営委員	：松田しずか	（久志中学校）

## 4 研究の実際

## (1) 糸満中学校【生徒数 579名】



〈学年別公開授業の取り組み〉

## ① 研究のねらい

ア 組織的・計画的に推進し、本校の教育課題の解決や学校教育目標・重点目標の具現化を図る。  
イ 教師の資質や指導力の向上を図り、学校の教育効果を高める。

ウ 職員相互の共通理解・共同研修の場とし、その充実を図る。

エ 『沖縄県学力向上推進5か年プラン・プロジェクトⅡ～学びの質を高める授業改善・学校改善～』を全職員共通理解・共通実践し、特に【方策1・2・3】に焦点をあて取り組み、授業改善の推進力を高めていく。

オ 『問いが生まれる授業サポートガイド』を活用し「主体的・対話的で深い学び」の授業改善に努める。

カ NIEの視点を取り入れた授業改善に取り組み、教科で指導案を検討し、全職員1回公開授業を行う。

キ SDGsの視点（「6つの視点」「7つの能力・態度」）を取り入れた授業改善に取り組む。

## ② 研究内容

ア 学力向上推進プロジェクトⅡ【方策1・2・3】を中核に組み込む

【方策1】日常化する（質的授業改善）めざす

- 自己肯定感を高める個人内評価等の積極的取組。
- 生徒指導の3つのポイント（自己存在感・

共感的な人間関係）

・自己決定)を生かした授業。

- 単元を通して、資質・能力を育む授業改善を推進する校内研究体制の充実。

【方策2】そろえる（組織的共通実践）

- アセスメントによる実態認識を揃える。
- みとる視点・観点を揃える。（共有する）
- ガイダンスとカウンセリング機能の充実。

【方策3】支える（発達の支援）

- 確かな児童・生徒理解。
- 支持的な風土をつくる学級経営の充実（ガイダンスとカウンセリング）
- 学びに向かう集団づくり。

イ 学年会での取組

- 学年の課題を明確にし、焦点化・重点化した具体的な実践項目を設定する。
- 学年の生徒指導（生徒理解）に関する共通理解を図り授業改善に生かす。

ウ 教科会での取組

- 各教科領域において指導主事を招聘しての研究授業を行い、授業研究会で研究内容を深める。
- 各教科や領域とも、『問い』が生まれる授業サポートガイドの活用や「NIE」の視点を踏まえた授業改善に努める。

エ 12月までに公開授業指導略案を作成し1人1授業を行なう。また、3つ以上の公開授業を参観する。（1人1授業3参観）

オ 学年公開授業を2学期の9月～11月中に期間を決めて学年職員全員が公開授業を行なう。

カ 生徒主体の学び合い高め合う授業づくりを推進する。

○ペア・グループ学習を取り入れた学び合いを学校全体として行なう。

○各学級とも意図的な座席配置を行なう。

キ 日常的な学習を支える力の育成を図る取組。

- ①ベル前着席 ②授業の開始 ③授業中の返事・音読 ④聞く姿勢 ⑤授業での学習活動 ⑥授業中の発言・発表 ⑦学び合い高め合う姿勢 ⑧認め合い支え合う姿勢 ⑨授業の終了 ⑩次の授業の準備

（糸満中学校学習の規律10項目）

ク 地域とともにある学校づくりの推進（コミュニケーション・スクールの推進、地域行事への参画）。

ケ 海洋教育(海人科)の推進。

③ 校長の関わり

ア 日々の授業観察等を通して「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けてチームの取組を支

援する。

イ 教職員評価システムを効果的に活用し、授業改善の視点を揃える。

ウ 職員を育てること、職員の良さを見つけることを意識して学校経営を行う。

(2) 潮平中学校（生徒数 298名）

## 校長の関わり

### 日々の授業観察及び研究授業の参観

日々かつ機会を通した  
OJT目線で教師力を育成する

教職員評価システムを効果的に活用

↓  
授業改善の視点を揃える

↓  
授業力の向上を図る

（学校における授業改善に向けた校長の関わり）

① 研究のねらい

ア 学校の課題解決を目指した研究・取り組みを行う職能成長を図る場とする。

イ 教職員の資質向上と課題解決のための共通理解・共通実践を図る場とする。

② 研究の内容

ア 三つの柱

○主題研究：学力向上推進と関連させながら、課題解決の取り組みを、全職員・全教科・領域で実施する。

○授業研究：授業実践と授業研究会を実施する。

○職員研修：教師の資質向上等を目指した研修を実施する。

イ 主題研究の進め方

○学習指導の工夫・改善

ウ 授業研究の実践（指導主事招聘を含む）

○一人一授業では、お互いの授業を公開し、授業改善に活かす。

→ 一人一授業三参観の実践

エ 「授業の見取り方」に関する教科ごと及び自己研鑽の一環で動画を視聴して、共通理解を行う。

オ 職員研修の実践

○ 職員の資質向上及び共通理解が必要な事項について計画的に実施する。

○ 自己研鑽の充実ならびに職能成長を図るため研究会等の参加を推奨する。

③ 校長の関わり

ア 日々の授業観察および研究授業を参観して、日々かつ機会を通したOJTで育成する。

イ 教職員評価システムを効果的に活用し、授業改善の視点を揃える。

## (3) 栗国村立栗国中学校【生徒数 15名】



〈オンラインによる理論研修会〉

## ① 研究のねらい

自分の考えを論理的に構成し、かつ根拠を示しながら相手に分かるよう言葉や文章で伝えることができる。この実践を行うことで「物事の中から問題を見だし、その問題を定義し解決の方向性を決定し、解決方法を決定し、解決方法を探して計画を立て、結果を予測しながら実行し、振り返って次の問題発見・解決につなげていく課程」を重視し、児童生徒に「課題解決力」身につけさせる。

## ② 研究の内容

- ア 県教育委員会「問い」の生まれる授業サポートガイドや「栗国小中スタンダード」を活用した授業実践。
- イ 日頃の教育活動において、本校の学力向上推進プロジェクトの充実を図る。
- ウ 伝達講習について
- エ 授業研究の実践測しながら実行し、振り返って次の問題発見・解決につなげていく課程」を重視し、児童生徒に「課題解決力」を身につけさせる。
- オ 職員研修の企画・運営

## ③ 校長の関わり

- ア 目指す方向性を示し、全職員と想いを共有。
- イ 職員の声に耳を傾け、「寄り添い・関わり」。
- ウ 週案や諸会議等で、職員へ激励のコメント。
- エ チーム栗国での対応。

## (4) 座間味村立慶留間中学校【生徒数 10名】



〈少人数、へき地の特色を活かした授業〉

## ① 研究のねらい

- ア 授業の工夫・改善により、日々の授業の充実を図る。
- イ へき地の特色を生かした実践的研究を深める。
- ウ 教師の資質の向上を図る。

## ② 研究の内容

学力向上推進（慶留間っ子スタイルの推進）

- ア 主体的・対話的に学ぶ児童生徒の育成を図る。
  - 学習規律・家庭学習の定着
  - 学習に向かう姿勢の育成
  - 一人一人に合ったきめ細かなわかる授業の実践・授業改善を図る。

## ③ 校長の関わり

- ア 日々の授業観察とフィードバック及び支援
- イ 教職員評価システムを効果的に活用し、職員を育てること。
- ウ 職員の良さを見つけることを意識する。
- エ 児童の家庭学習のサイン（児童・生徒への励まし）

## (5) 佐敷中学校（生徒数 414名）



〈生徒が全面に立ち、進める生徒会集会〉

## ① 研究のねらい

「学びの質を高める授業づくり」を通し、生徒指導の4つのポイントを意識した教育活動の実践を展開する。このことにより、生徒の自己肯定感が高まり、生徒が意欲的に学習活動に取り組むと考える。

## ② 研究の内容

- ア「生徒指導の4つのポイント」を意識した教育活動の工夫
  - 講師を招聘し、理論研究などの講義やワークショップを実施する。
  - 指導主事を招聘して、研究授業及び全体研修会を実施する。
  - 「生徒指導の4つのポイント」を学級・学年・学校全体など組織的に実践する。
  - 「生徒指導の4つのポイント」を意識した



教育活動を実践しての結果を、定期的に生徒アンケートを実施することで取り組みの見直しや改善を行う。

- Q-Uテストを活用し、生徒の実態把握及び支援の手立てを組織的に行う。

イ 教科会で授業リフレクションを取り入れた授業改善の推進

- 全教科で、授業リフレクションを取り入れ、教科会の充実を図る。
- 一人一公開授業の指導案を事前に練り合い、授業後はリフレクションを行う。
- 授業リフレクションで話し合った内容は、リフレクション用紙に記録し掲示する。

③ 校長の関わり

- ア OJTを意識しながら日々の授業観察後出来るだけ早く感想を伝える。
- イ 教科会や学年会へ不定期に参加しながら効果的に意見交換を行い、授業改善の視点を揃え、授業力の向上を図る。

5 成果と課題

各校の○成果及び●課題は一覧のとおりであった。

糸満市立糸満中学校
○1年間の研究を通して、研究のねらいで意図する変容が見られた。○各教師が授業改善に努めており、学校評価での生徒の授業に対する評価が高くなっている。●「学力向上推進プラン・プロジェクトⅡ」の更なる推進を図る。●下位の生徒や配慮を要する生徒に対し個に応じた支援を推進する。
糸満市立潮平中学校
○全職員が一人一授業三参観の計画を立て授業前後の研究を進める。○沖縄県版児童生徒質問紙・i-checkの調査結果を通し、生徒の実態把握と授業改善に連動していると思われる。●学習評価の在り方、テスト改善について継続して研依然と低い自己肯定感の向上、自学自習力の向上を検証する。
栗国村立栗国中学校
○教師間のチームの高まり（検討会の充実）。教室の掲示や教材づくりなど、指導のアイデアが増えた●授業実践の前後でアンケートを実施し、校内研テーマを意識した授業実践により児童生徒がどう変容したかを見とれるようにしたい。
座間味村立慶留間中学校
○身に付けさせたい力を踏まえた「めあて」意識的に設定することで、児童生徒が、学習の見通しをもって主体的に学習する姿が見られた。○校内研・学推以外でも、小鳩会活動（児童会・生徒会）を推進することで、自主性が生まれ●小規模校における、練り合いの部分が弱いため、学習形態を工夫していく必要がある。（他校とのオンライン学習の推進等）

南城市立佐敷中学校
○積極的に授業公開に向かい、授業前後の研究会が定着してきた。○授業参観することにより電子黒板をはじめいろいろな教具を積極的に活用する工夫が見られる。●単元テストと定期テストをどのように活用して授業を充実させるか研究を進める。●習熟の低い生徒への個別化の手立てを工夫する。

6 おわりに

各校とも学校長のリーダーシップのもと、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた教育実践や、カリキュラムマネジメントによる教科等横断的な学習指導など、創意工夫を凝らした取り組みが行われている。

令和4年度全日本中学校校長会調査研究報告書によると、「主体的・対話的で深い学び」について①重点的に取り組んでいる教科等の割合が高い順に国語、理科（6割）、社会、外国語（英語）総合、数学（5割）他教科においても5ポイント以上増加している。②重視している指導方法として「子ども同士の協働」、知識ジグソー法等。③指導法で工夫したことについては「ICT機器を活用した学習」（8割）「ペア・グループ学習における机の配置の工夫」（5割）④生徒はどのような面が向上するかでは「協力・協働する力」（7割以上）「学習意欲」（6割）「思考力・判断力・表現力等」（5割）などが報告されている。

コロナ禍で教育活動等は、多大な影響を受けた。新型コロナウイルスの感染症の類型が見直されることによりアフターコロナの時期を迎え、さまざまな生活様式も変化を見せている。学校現場では、諸事情における児童生徒の「学びの保障」に向けた取組やSociety5.0及びWeb3.0のグローバル化や技術革新の急速な変化に対応したGIGAスクールの推進、ICTを活用した個別最適な学びと共同的な学びが求められている。

今後は、アフター&ウィズコロナと向き合い、新たな学校生活の様式を構築して、さらなる「魅力ある学校づくり」の教育活動を展開するであろう。

引用：令和3年度「島尻地区学力向上推進実践報告書」  
令和4年度全日本中学校校長会 調査研究報告書

## 第3分科会

### 研究主題

よりよく生きるための道徳性の育成と健康で安全な生活を実現するための教育の充実

### 1 はじめに

現代社会は、物質的に豊かで便利な生活を手に入れた反面、規範意識の低下、人間関係も希薄になり、子ども達を取りまく環境も厳しい。

このような状況下、子ども達が心豊かに、たくましく生きるために、学校における道徳教育の充実はますます重要になっている。

道徳の時間を要として、学校の教育活動全体を通して、計画的・発展的に指導することが必要である。

### 2 主題設定の理由

急激に変化する社会にあって、子ども達が心豊かに、よりよく生きていけるようにするためには、生徒一人一人に、道徳的な心情、判断力、実践意欲と態度などの道徳性を身に付けさせることが大切である。そのためには、他教科等との関連を図りながら、「特別の教科道徳」において、物事を多面的・多角的に考え、議論していく授業を実施できるよう、校内の指導体制の充実、道徳的諸価値について自覚を深める活動の充実を図ることが必要である。

このような視点から、校長としての具体的な関わり方を論じ、協議題に迫る学校経営の展望を究明し共有するため本主題を設定した。

### 3 研究の視点

- (1) 「道徳科」の授業力向上の取り組み
- (2) 校内指導体制の充実
- (3) 校長の指導性（関わり）

### 4 研究の実際

（今帰仁中学校生徒数290名）

文科省指定「道徳教育の抜本的改善・充実に係る支援事業（令和3・4年度）」の研究実践をを踏まえ、道徳の授業改善に継続して取り組み道徳教育の充実を図っている。

- (1) 「道徳科」の授業力向上の取り組み
  - ① 授業プランシートの工夫  
「道徳の評価7つの視点」を根拠に形式を揃える
  - ② ローテーション授業の取り組み
  - ③ 授業における共通実践項目の設定

提案者：宮城 研治（大宜味中学校）  
司会者：松本 優一郎（今帰仁中学校）  
記録者：永野 正也（東中学校）  
運営委員：永野 正也（東中学校）

- ④ 振り返りシートによるリフレクション
- ⑤ 県外講師等の積極的な活用



県外講師を招聘した校内研修



ローテーション授業

### (2) 校内指導体制の充実

- ① 校内研修推進委員会（各学年代表・研究主任・校長・教頭）を週時程に位置づけ
- ② 「集団づくり研究部会」「対話活動研究部会」「ICT研究部会」による学級経営や対話活動、全校共通実践の道徳教育について研究・実践
- ③ 授業プランシートの作成（同一教材担当チーム）  
→授業公開→振り返りの流れを週内で統一化



各研究部会

### (3) 校長の指導性

- ① 研究主任、道徳推進教師と常に対話を心がけ、研究推進状況の把握、校内研修推進委員会における指導助言

- ② 授業プランシートによる授業者の授業づくり、教材分析等の事前確認と共有
- ③ 道徳の授業における授業観察及び確実なフィードバックや週案の確認等を通じた指導助言

（大宜味中学校生徒数78名）

自分の思いや考えを伝え合い・聴き合う生徒の育成  
～「考え、議論する道徳」の視点に立った授業づくり  
～文科省指定「道徳教育の抜本的改善・充実に係る支援事業（1年次）」を以下のように取り組んでいる。

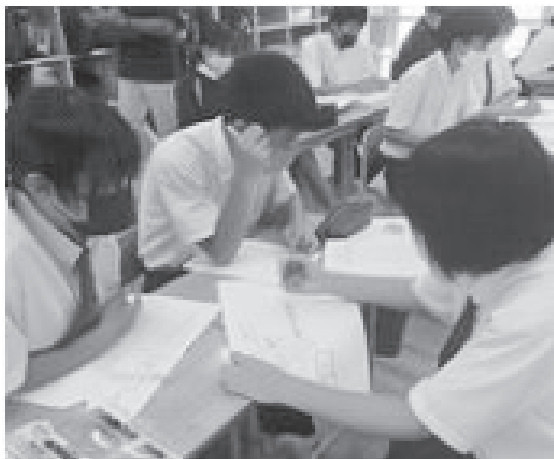
道徳科についての生徒アンケートでは、「学級の友達との間で話し合う活動を通じて自分の考えを深めたり、広げたりすることができているか」の回答が「とても思う」54.7%と「思う」39.1%と合わせて93.8%であることと比べると「自分の意見や考えをまとめ、発言できるようになったか」では、81.1%となっている。自分の意見をまとめ発言することが課題である。

表現力向上には、自分の考えを述べたり、相手の考えを聞いたりすることで自分の考えを深化させるなど、授業に主体的に参加することが大切だと考える。そのため、「考え・議論する」道徳の視点に立ち、授業づくりを行っていくことが必要となる。

そこで「自分の思いや考えを伝え合い、聴き合う生徒の育成」をテーマに道徳科の授業を通して、教師個々の授業力の向上と生徒が主体的・対話的に学ぶ授業に取り組むことで道徳実践力を育み、生徒の思いやりの心や規範意識をさらに高めることが出来るようになる。

(1) 「道徳科」の授業力向上の取り組み

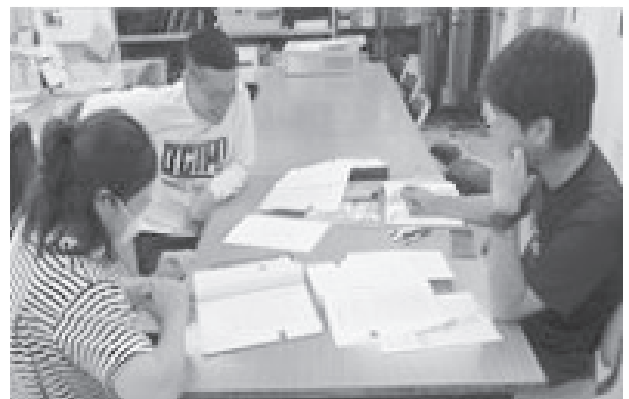
- ① 全職員による道徳科授業のローテーションの共通実践
- ② 本校生徒の実態改善に向けた取り組み
- ③ 地域の特色を生かした道徳教育の取り組み
- ④ 道徳ノートを活用
- ⑤ 互見授業や授業振り返りの充実
- ⑥ 講師、指導主事の積極的活用



ローテーション授業

(2) 校内指導体制の充実

- ① 学校教育目標・重点目標達成のために、具体的方針を踏まえて研究する。
- ② 道徳科の授業を全職員で指導案検討・授業を実践する。
- ③ 理論研究と研究授業を並行して行う。
- ④ キャリア教育を視野に入れて深化していく。
- ⑤ 研究方法
  - ・月一回程度の研修日を設定する。
  - ・国頭教育事務所指導主事要請を活用した道徳授業改善の推進。
  - ・研究授業の実践は、道徳で行い、村指導主事を要請し指導助言を仰ぐ。
  - ・授業研前には、指導案検討会や検証授業などを各チームで協力して行う。
  - ・夏季研修は、校内で理論研修を（道徳・ICT）で行う。



授業づくり(指導案検討会)



研修会



道徳科オリエンテーション

(3) 校長の指導性

- ① 学校経営ビジョンの周知徹底とすべての教育活動において「道徳教育」の視点意識した取り組み。
- ② 授業観察、振り返りの実施。
- ③ 校内研修推進における指導助言。
- ④ 週案(コメント)学校便り等での指導助言。

(東中学校生徒数31名)

(1) 道徳の授業力向上の取り組み

- ① 「絆・立志・感謝を視点とした教育活動」の3つの視点を持った授業づくり
- ② 主体的・対話的で深い学びを育む交流場面の工夫（タブレット端末の活用）
- ③ 東校6 Powers（資質能力）を意識した授業改善（振り返りと評価の充実）
- ④ 各学年、担任と担外によるローテーション授業の実施

(2) 校内指導体制の充実

- ① 校内研修推進委員会（隔週火曜日に設定）を設置し、各部会との連携
- ② 校内研修の充実
  - ア 各教師年1回以上、校内研修の互見授業と位置づけて授業を公開する（道徳科の授業を公開する）
  - イ 互見授業は、指導案検討と振り返りの実施（ランチミーティング）
  - ウ 村主催の研修会は、小中合同で行い、全職員体制で実践



授業後の振り返りの様子(ランチミーティング)

- ③ 地域一体型学校行事（ていーだ学校など）の体験活動や各教科等で「絆・立志・感謝を視点とした教育活動」と東校6 Powers（資質能力）を意識した授業改善（振り返りと評価の充実）を図り道徳教育の充実を図る

(3) 校長の指導性

- ① すべての教育活動において、「主体性」を育むことを視点にした取り組みを推進
- ② 道徳科を中心とした授業づくりの推進
- ③ 近隣三中学校との連携（学びの場の提供）の推進
- ④ 授業参観及び週案による指導助言

5 成果と課題

(1) 成果

- ① 発問を精選することで、発表する生徒が増えた。
- ② タブレット端末を活用することで、自分の考えを表現しやすくなった。
- ③ タブレット端末の活用で、仲間の多様な考えを瞬時に確認することができ、自らの考えを再構築することが可能となった。（交流場面の工夫）
- ④ タブレット端末の活用しての振り返りを行い、生徒の変容を継続して見取ることができ、また関係職員で共有することで評価に生かすことができた。（振り返りと評価の充実）
- ⑤ ローテーション授業を行うことにより、常にチームとして取り組むことができ、道徳授業づくりの理解の深まりや意欲の向上が図られている。
- ⑥ 県外講師等の活用について、出前授業、授業観察・指導助言講話等、オンライン、対面での有意義な研修が実施できた。
- ⑦ 自分の思ったことを発信する生徒が増えつつある。
- ⑧ 校内研究から全職員体制で臨み、教材研究を行うことができた。

⑨ 高寧研修や研究授業を通して、授業づくりを一から見直し授業の質を高めつつある。

(2) 課題

① 道徳性は育まれたが、日常の実践の場で活用する力は不十分である。日常の実践の場でいかに活用できるか。

② 授業力向上へ教職員の意識高揚が課題である。  
(主体的対話的で深い学びへの転換)

③ 教材研究の時間確保のために更なる業務改善。

④ 地域との連携・人材活用等の計画策定と推進による道徳教育の充実。

⑤ ローテーション授業を行っているため、評価の作成の仕方を模索している。

6 おわりに

社会の在り方が大きく変化し、人と人の関わりや繋がりの希薄化が懸念されている。そのような中、次代を担う子ども達に豊かな心を育み、自らの人生をよりよく生きていけるようにするために、自他の生命を尊重する心を基盤に、豊かな情操、規範意識、公共の精神、健康・安全、基本的な生活習慣を育み、伝統と文化を尊重し、それらを育んできた我が国と郷土を愛する態度を培うことが求められている。このような中、「特別の教科道徳」の役割がますます重要であると考えられる。

校長が指導性を発揮しながら、思いやりの心、感謝する心、感動する心など、子ども達の豊かな人間性や社会性を育み、人間としてのあり方や生き方を考える道徳教育の充実を全校体制で推進していきたい。

本研究は各学校それぞれの実態や実情に合わせた実践事例となっている。引き続き研究を深めていきたい。

## 第4分科会

### 研究主題

自己理解を促し、将来にわたって人としての生き方を深める生徒指導とキャリア教育の充実

提案者：知念泰志（上山中学校）  
 司会者：大城美千代（神原中学校）  
 記録者：吉村雅也（那覇中学校）  
 ”：山里崇（球美中学校）  
 運営委員：根路銘国斗（名護中学校）

### 1 はじめに

予測困難な社会を「生き抜く力の育成」、持続可能な社会の担い手となるための「社会に貢献できる人材の育成」は、これからの学校教育の目指すところである。さらに、これからの社会を担う人材は、社会的・職業的自立を図るための基礎的・汎用的能力を身に付けさせ、他者との連携や協働を行うことで自己実現を図り、社会的自立に向けて資質・能力を育むことが求められる。このような資質・能力を育むためには、生徒自らが望ましい人間関係を構築し、豊かで充実した学校生活を過ごすことが必要である。

### 2 主題設定の理由

沖縄県キャリア教育の基本方針（R2.2）では、本県のキャリア教育の目標として「目的意識を持って、様々な人と協働し、社会を支える自立した人材の育成」と設定されている。その目標の達成や「目指す生徒」を育成するために生徒に身につけさせたい4つの基礎的・汎用的能力が「かかわる力」「ふり返る力」「やりぬく力」「みとおす力」と整理・表現され、各学校では取り組みを焦点化・具体化したキャリア教育の推進が求められている。

これらの能力は包括的な能力概念であり、必要な要素をできる限り分かりやすく提示するという観点でまとめたものである。この4つの能力は、それぞれが独立したのではなく、相互に関連・依存した関係にある。このため、特に順序があるものではなく、また、これらの能力をすべての者が同じ程度あるいは均一に身に付けることを求めるものではない。

本研究会では、そのうち各学校の共通課題である「人間関係・社会形成能力の育成：かかわる力」「課題対応能力の育成：やりぬく力」の2要素に着目し、各学校の実態や特色に応じた取り組みをつなぎ、キャリア教育全体の推進の方策を探っていきたいと考える。

### 3 研究の視点

- (1) 「人間関係・社会形成能力の育成」を図るための取り組みの推進
- (2) 「課題対応能力の育成」を図るための取り組みの推進
- (3) 校長の指導性と関わり

### 4 研究の実際

【那覇市立上山中学校の実践】生徒数377名

本校では、「自ら学び考え、心豊かに、未来を創造する逞しい生徒を育成する」ことを目指し、自己肯定感や自己有用感を教育活動全般の中で高めながら、特別活動の充実とダイアリーの活用を図ることで生徒個々のキャリア発達を促す取り組みを進めている。

(1) 「人間関係・社会形成能力の育成」を図る取り組み

① 小中一貫教育の推進（天妃小・開南小）

3校の教員が「学習部会」「生徒指導・教育相談部会」「特別支援部会」に別れ、今年度は「『聞く』『話す』活動の工夫と充実」を重点として合同研修会、合同授業研究会を実施している。

ア 統一した学習規律の実践

イ 双方に出向いての朝のあいさつ運動

ウ 交流朝会、6年生の中学体験

エ 特別支援学級交流（生徒・保護者）

オ 年2回の小中一貫質問紙によるPDCA

② 他者と関わる力の向上を目指し、特別活動の充実を図る取り組み。

ア 全学年足並みを揃えた計画的な話し合い活動の充実で、課題を解決し、改善策を見出し、実践する力の育成を図っている。

イ 話し合い活動に焦点を置いた校内研修を実施することで教師の技量の向上を図っている。（講師招聘、授業研究会、模擬授業）

ウ ペア・グループ学習の充実を校内研究のサブテーマに据え、コロナ下で実施が難しかった授業での人と関わり合いながら対話で学びを深める活動の充実を推進している。普段の管理職の授業参観や一人一公開授業で、見取る視点の1つとしてフィードバックを実施している。

エ 学級や生徒会での決定事項は学級活動コーナーや生徒玄関に生徒会コーナーを設け、掲示を行い学級と生徒会の連携と自治意識を高める取り組みを推進している。

オ 生徒(会)が主体的に企画する学級と連携した取り組みや行事の実施（リーダー研修会の取り組み）

○ SDGsプロジェクト（R4）

○ うえのやまつりプロジェクト（R5）

(2) 「課題対応能力の育成」を図る取り組み

① 「夢実現ダイアリー」の活用

以下のことを期待し本年度から導入している。

- ア 基本的な生活習慣の記録で見える化し、自己管理能力を向上させる。
- イ 自ら取り組むべき事を計画し粘り強く実行していく力を育成する。
- ウ 事実の記録と自分自身を振り返り気持ちを残すことで自己理解を深める。
- エ 短期の計画を立て、1年間毎日事実や思いを記録することで、自分の変容や成長に気づかせ、ポートフォリオの1つとして「キャリア・パスポート」の編集へ繋げる。
- オ 自主学习ノート「パワーアップノート」と連携した家庭学習の充実で自学自習力を高める。
- カ 教師とのコミュニケーションツールとしての役割もある。(週1回のフィードバック)

(3) 校長の指導性と関わり

- ① 国・県・市の諸調査や年2回の「キャリア教育アンケート」に基づいた実態把握で、「特別活動の重点化」「夢実現ダイアリーの導入」について説得力のある次年度の方針を提示した。
- ② 年度当初にキャリア教育の推進について十分な共通理解を図り、日々の授業参観のフィードバック、校長だよりや訓話を通して共通実践を図ることを職員に促している。
- ③ 校務分掌の人的配置を工夫し、特活担当、キャリア教育担当、校内研担当等が教頭の指導、支援を受けながら組織的に連携して意図した活動が推進できるようにしている。
- ④ 校長同士の研修や協議、交流の場での情報交換から得るものが多い。特に小中一貫の運営部会や那覇市の本庁ブロック（中学校3校、小学校7校）での月1回の研修では、近隣校の学校経営に触れ、自校の改善策のヒントをもらっている。

【那覇市立神原中学校の実践】生徒数323名

本校では、一人一人のキャリア形成と自己実現をめざし「自己指導能力」を育む取り組みを重視している。さ

らに、教職員の指導力向上を図るため、組織力を強化し、「報・連・相+確認」を徹底している。

(1) 「人間関係・社会形成能力の育成」を図る取り組み

① 那覇市小中一貫教育の推進

本校は、平成24年から那覇市小中一貫教育のモデル校に指定されて以降、義務教育9カ年を見通した先進的な小中一貫教育を推進している。

ア 「みそあじ」の徹底→

重点事項：あいさつ

イ 特別支援交流会（小学生特支の参加）

ウ リーダー研修会（小学生リーダーの参加）

エ 交流活動→授業・部活動・合唱コンクール

オ 小中合同授業研・小中合同研修会（年3回）

② 主体的な生徒会活動（昨年度～今年度）

昨年夏季リーダー研修会

虹色に輝く神原中プロジェクト「あいさつ」から始まる取り組み

ア 研修Ⅰ（コミュカUP）

イ 研修Ⅱ（校長講話「あいさつ」のレベルUP）

ウ 研修Ⅲ（CIS教育研究所による講話とWS）

エ 研修Ⅳ（リーダーによる「神中の「あいさつ」スローガン」を考えよう」のめあてで班毎に「あいさつ」に続くつなぎ言葉を出し合う。

オ 2学期（全校生徒が投票し「あいさつは心を繋ぐ第1歩」に決定し、生徒玄関に掲示。

カ 生徒会執行部・生活委員会による毎朝のあいさつ運動と連動させた取り組み。

(2) 「課題対応能力の育成」を図るための取り組み

① 「My diary」の効果的活用

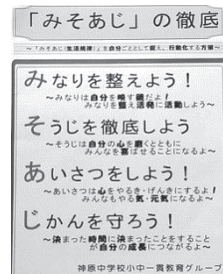
生活リズムを整え、授業と連動した家庭学習の定着を目的に実施し、帰りの会で「振り返り」を書く時間を設定することで、生徒自身が家庭学習の本来の意義を理解し、自発的な学習にすると共に家庭での学び方を身につける取り組みである。定期テスト計画や健康観察にも役立っている。

② 「キャリア・パスポート」で学びをつなぐ

特別活動（学級活動(3)）を要とし全教育活動を通したキャリア教育の推進。2小学校と共通テーマで振り返りとコメントや言葉かけを重視。

(3) 校長の指導性と関わり

- ① 職員朝会で校長だよりを活用した校長訓話。
- ② 職員の組織力強化と危機管理意識醸成を図る。
- ③ 週案への個別コメントで激励しやる気喚起。
- ④ 校長室は常にオープンにし、悩み相談を徹底。
- ⑤ 家庭と連携・協働した家庭学習の取り組み。
- ⑥ 家庭学習ノート1冊終了する毎に生徒振り返



り・保護者コメント、担任・校長コメントで激励。

- ⑦ 教師の指導力向上の取り組み。
- ⑧ 「授業観察簿」活用による、意図的・計画的な全教師の授業観察の徹底と指導助言。
- ⑨ 一人一授業の校長助言（指導案助言と振り返り）

#### 【那覇市立那覇中学校の実践】生徒数596名

本校では教育目標「未来に生きる 確かな学力 豊かな人間性 健康・体力を育む」を達成するために、スローガンである「那覇中生のプライド実現」を合い言葉に、「知・徳・体バランスのとれた成長」、「誇れる自分、誇れる学校、誇れる地域・ふるさと」を学校経営の基本理念に据え、教育活動を展開している。そこで、キャリア教育の4つの視点を踏まえた実践を通してキャリア・パスポートを活用し、自己理解・自己管理能力を重視している。

##### (1) 「人間関係・社会形成能力の育成」を図る取り組み

- ① 那覇中グループ小中一貫の取り組み
  - 小学校3校（泊・若狭・那覇）
  - ア 生徒指導の共通実践10項目ポスター
  - イ 4つの研究部
    - 学力向上推進部
    - 児童生徒理解部
    - 特別支援研究部
    - 交流推進部
  - ウ 共通質問紙の分析・改善

##### ② 生徒会活動による集団づくり

- リーダー研修テーマ「よりよい那覇中学校を自分たちの手で創りあげよう」
- ア 研修1「リーダーとは」
  - イ 研修2「各部課題と改善策を話し合う」
  - ウ 研修3「今後のトイレの使用について」
  - エ 研修4「レクリエーション」

##### ③ 特別活動を要としたキャリア教育の推進

- ア 「話し合い活動」の共通実践事項
- 「書くこと」と「話すこと」を一体化した話し合い活動の実践
  - 他者の発表や表現から自己の思考・判断・表現の再構成を行う。
- イ 学級活動で行うこと
- 学級や学校における生活づくり参画
  - 日常の生活や学習への適応と自己の成長及び健康安全
  - 一人一人のキャリア形成と自己実現

##### (2) 「課題対応能力の育成」を図る取り組み

- ① 「那覇中メソッド」を活用し自学自習力を高めるために、「なりたい自分」から「なれる自分へ」を掲げ、1週間の計画・実行・振り返りを行っている。目標管理（なにを いつまでに どうする）を考え、検温による



体調管理も継続している。

- ② 「キャリア・パスポート」で学びの蓄積
  - 沖縄県版の一部と学年オリジナルワークシートを活用し、学期の個人目標、行事のねらいが達成できたかなど振り返りをポートフォリオとして蓄積している。

##### (3) 校長の指導性との関わり

- ① 年度初めに、学校教育目標達成に向け、学校経営及び学年経営、学級経営、教科経営との連動を図り、目標管理（なにを いつまでに どうする）を意識する。あらゆる場面のあいさつで生徒は、知・徳・体を意識した発表を実施している。
- ② 教頭を核に校務分掌を動かし、組織を一体化するために、キャリア担当と特別活動担当、学力向上推進担当、生徒指導担当、学年主任、部活動主任、情報担当、養護教諭等を活性化し、学力と生徒指導、特別支援を連動し、数値のよき変容を目指す。
- ③ 全国学調の生徒質問紙と独自質問紙による生徒等へ調査（7月・12月）を実施し、現状分析、改善へ活かす評価指標の達成への手立てを図る。
- ④ 「確かな学力向上」を目指し「なほ授業づくり」の実際を行う。指導と評価の一体化。単元テストの項立ては各教科で全学年揃える。定期テストの項立ては、到達度調査の項立てを参考とする。ポイントは「書くことの再構成活動」である。
- ⑤ 自己肯定感・自己有用感を高めるために、「～できるようになった。～について理解している。」等具体的に、その過程を褒める。活躍や素敵感想、優しい行動など給食アナウンスや校長だより、HPに紹介する。

#### 【久米島町立球美中学校の実践】生徒数110名

本校では、教育活動全般を通して、知・徳・体・郷土愛の調和のとれた生徒の育成を目指し、生徒一人一人の個性の発見とよさや可能性を伸ばす教育活動を展開している。特に今年度は主体性の育成と自己肯定感を重視し、キャリア教育の充実に取り組んでいる。

##### (1) 「人間関係・社会形成能力の育成」を図る取り組み

- ① 地域資源を活用した地域学習の推進
  - 本校はこれまで、総合的な学習の時間に「地域を知ろう（1年）」「地域の理解を深めよう（2年）」「地域の未来を考えよう（3年）」と「地域（久米島）」をテーマに地域学習に取り組んでいる。各学年のテーマに沿った学びの中で、地域資源（施設、NPO法人等）との連携、それらを支える久米島町関係各課との連携で「かかわる力」を育むと共に、SDGs達成に向けた持続可能な社会を担う資質・能力の育成に取り組んでいる。



② 教科等横断による統合的な学びを推進

本校は、(1)①「地域学習の推進」と併せて統合的な学習の時間を核とした教科等横断による統合的な学びを推進している。ESDやSDGsをキーワードとして、地域資源を有効活用し、総合的な学習と教科等を横断して学ぶことができるようにカリキュラムを工夫している。

③ 久米島地域連携型中高一貫教育の推進

6年間の計画的、継続的な指導体制を活かしゆとりある学習環境の中で確実な学力の定着を図る。また、久米島の自然や文化を学び、幅広い教養と郷土愛を育み、よりよいキャリア発達を目指す。

(2) 「課題対応能力の育成」を図る取り組み

① シラバスによる年間授業計画の可視化

年度当初に各教科の授業計画、評価計画、家庭学習の手立て等を記した「シラバス」を配布して、各教科の学習の取り組み方を説明。生徒が「何を学ぶのか」「どのように学ぶのか」を見通すことで計画的に学習に取り組む姿勢を育てている

② 自立した学習者育成のための取り組み

自立した学習者を次の手立てで育成することにより困難な課題に対しても柔軟に対応し課題を解決する能力を育てている。

ア 「自主学习ノート」の効果的な活用

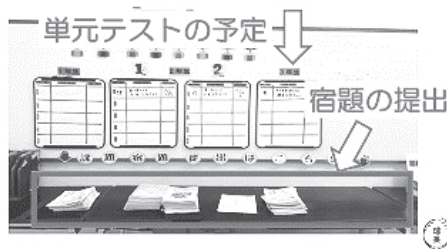
今年度も授業の振り返りや予習を各自の計画表（ワーキングポートフォリオ）をもとに取り組み、自学自習力の更なる育成に努めている。

イ ワーキングポートフォリオの活用

前年度から自立した学習者育成を目指し、キャリア・パスポートに沿った「ワーキングポートフォリオ(自主学习の計画と振り返り表)」を活用している。この取り組みは、一週間の家庭学習計画と前週の振り返りを一枚で可視化することで学習の達成感を味わえるようにしている。

③ 単元テストによる学びの振り返りを推進

令和4年度から定期テストに代え、より短期間の学びの定着を図る「単元テスト」に取り組んでいる。そのことにより、目標未達成者の補習等を通して、確かな学力の定着に努め、「やりぬく力」を育てている。



(3) 校長の指導性との関わり

① 教育活動全般において、生徒指導の4つのポイ

ントとキャリア教育の視点に照らしながら、適宜指導助言を実践。

② 学校教育全般において「チーム球美中」として協働体制づくりと職員間の同僚性を育み、より良い教育活動を実践。

5 成果と課題

(1) 成果

① 自己管理能力を高める取り組みで基本的な生活習慣や自学自習の面で効果が表れてきている。

ア 「夢実現ダイアリー」を活用することで生徒の自己管理能力を測る指標が向上する傾向が見られる。(上山中)

イ 「Mydiary」を書く時間を確保し活用することで、「自学自習力」が向上している。(神原中)  
ウ 那覇中メソッドを活用することで、自己管理ができ、そこに教師のコメント、保護者の声かけで自己肯定感が高まりつつある。

エ シラバス、ワーキングポートフォリオ等を通して、生徒自ら学びに向かうことができるようになり、「課題に対応する能力（やりぬく力）」の育成に繋がった。

② 特別活動における学級会活動、生徒会活動などの集団活動を通じた各校の取り組みでは、「人間関係・社会形成能力の育成」に向けた実践がなされている。

(2) 課題

① 那覇市では今年度から小中一貫コーディネーターの役割業務が変更された。これまで培ってきた効果が見られる取り組みを継続していくための小中の連携の在り方を模索していく必要がある。

② 離島校故の人的入れ替わりの早さや教職経験の浅い教員に対応して、取り組みを浸透させ実践を揃えていく支援・指導体制を確立していく必要がある。

6 おわりに

令和4年度の～5年度の各学校の実態や特色に応じた取り組みを持ち寄り、まとめる形で研究を進めた。

本研究を通して、キャリア教育の取り組みを活性化するとともに、各校が取り組んでいることについて、その成果や課題を整理し共有することができた。

今後も、効果的な取り組みを継続しながら、明らかになった課題に対して、具体的で計画的な対応策を講じていくために、地区の中学校との積極的な情報交換や近隣小学校との小中一貫教育や中高連携教育の推進などにさらに研究を深め、「自分で考え、計画して、行動に移すことのできる子ども達」を育てていきたい。

## 第5分科会

## 研究主題

多様化した教育課題に対応できる学校経営と教員の育成

## 1 はじめに

令和の日本型学校教育における答申においては、実現すべき教師の姿として「教師が技術の発達や新たなニーズなど学校教育を取り巻く環境の変化を前向きに受け止め、教職生涯を通じて探究心を持ちつつ自律的かつ継続的に新しい知識・技能を学び続け、子供の主体的な学びを支援する伴走者として」学び続けることの重要性が強調されている。

私達、学校管理職は、教師が学び続ける存在であることを支援していくため、「教師に学びの資源（時間・研修機会等）」を確保すること、また、「学びを深めることができる環境づくり（組織・運営）」を図ることに努めなければならないことが引き続き求められている。

## 2 主題設定の理由

教師は、子供たちにとって身近な存在のうちの一人であり、その人格形成に与える影響は大きい。主体的に学び続ける教師の姿を目にすることで、自らも主体的に学び続ける意欲を子供たちが培うことが期待できる。

本県では、学力向上の取組、いじめ・不登校などの生徒指導上の課題やキャリア教育・進路指導への対応等の従来から指摘されている課題に加え、新しい時代に必要な資質・能力の育成、そのための主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善や道德教育の充実、ICTの活用、特別支援教育等、新たな教育課題も枚挙にいとまがなく、学校は複雑化・多様化する課題に直面している。

このような学校が直面する多様化した教育課題に対応していくためには、学校の教職員がチームとして職務を担い、学校の教育力、組織力の向上を図っていく必要がある。

また、教職員の専門性と実践的な指導力の向上を図り、チーム学校の一員として学校運営に参画する教職員を育成することが必要となることから、本主題を設定する。

## 3 研究の視点

学校が直面する多様化した教育課題に対応していくため、次の2点を研究の視点とする。

- (1) 多様化した教育課題に対応する教職員の専門性と指導力を発揮する研修や学校運営の在り方「教職員の資質能力の向上」

提案者	：狩俣典昭（下地中学校）
司会者	：砂川泰範（上野中学校）
記録者	：具志堅勝司（東江中学校）
運営委員	：玉寄兼明（野甫中学校）

- (2) 学校経営に積極的に参画する教職員の育成や人事評価の在り方

「チーム学校としての組織力の向上」

## 4 研究の実践

## 【宮古島市立下地中学校】

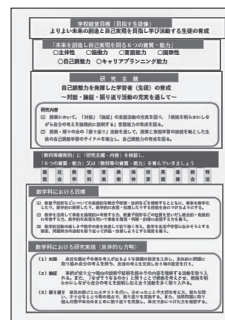
- (1) 多様化した教育課題に対応する教職員の専門性と指導力を発揮する研修や学校運営の在り方「教職員の資質能力の向上」

## ① 教科プランを軸とした組織的研究の推進

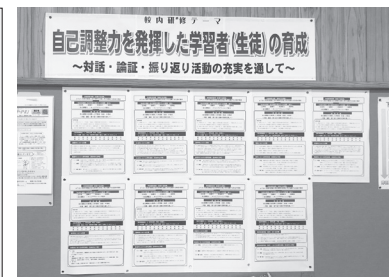


第1回校内研修（研究主任説明）

本校では、研究テーマ「自己調整力を発揮した学習者の育成」に向けて、研究主任（ミドルリーダー）を中心として研究を進めている各教科における研究の日常化を図るため、教科毎に「教科プラン」を作成、研究内容を教科の特性を踏まえて具体化し、「対話」「論証」「振り返り」の場面で検証を図りながら、授業力の向上（専門性・指導力）を目指している。



数学科教科プラン



教科プラン（各教科）職員室掲示

② 組織的授業改善に向けた「自己申告授業」の実施



R4年度 自己申告授業のようす

第1回校内研の研究主任の説明を受け、校内研を踏まえた「自己申告授業（互見授業）」を実施「対話」「論証」「振り返り」の視点から組織的授業改善を目指し、「学びづくり班会議」の中で相互にリフレクションを実施した。

③ 教職員評価（当初・中間面談）を活用したフィードバックの実施（校長としての関わり）

教師の資質能力の向上と学校組織の活性化をねらい、前記②の自己申告授業と教職員評価（面談）を接続し実施している。授業の参観は管理職も参加、授業と同じ週に当初（中間）面談を実施し、その中で校内研の研究内容を踏まえながら、授業者一人一人にフィードバックを実施した。

項目	内容	評価	改善点
授業計画	単元：1年 第1回 LUN12/T2/T3-2	下級部	時数未定
研修テーマ	自己調査力を養った学習者（生徒）の育成 ～特別「論証」授業活動の改善を目的として～		
研修内容	1. 授業実践 2. 授業観察 3. 振り返り		
研修結果	1. 自己調査力を養った学習者（生徒）の育成 2. 「論証」授業活動の改善を目的として		
校長コメント	1. 自己調査力を養った学習者（生徒）の育成 2. 「論証」授業活動の改善を目的として		

校長フィードバック資料

(2) 学校運営に積極的に参画する教職員の育成について「チーム学校としての組織力の向上」

- ① 6つの資質・能力の育成に向けたカリキュラム・マネジメントの推進と組織編成
- ア 校長の経営ビジョンの明確化と人が育つ組織づくり

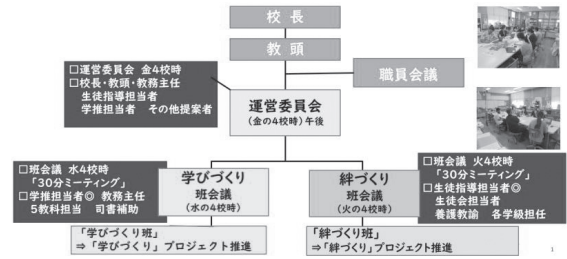


経営ビジョン（学校グランドデザインより）

本校では、21世紀を生きぬくための力を育成するため、「未来を創造し、自己実現を図る6つの資質・能力」を設定しカリキュラム・マネジメントを推進する中でその育成を図っている。

また、2つのプロジェクトとそれを推進する2つのチーム（班）を設置し、教職員一人一人が学校運営を自分事として捉え、教育活動の充実と学校改善を目指していけるよう、組織編成を工夫し、その機能化を図っている。

※ 2大プロジェクトの推進と組織編成について



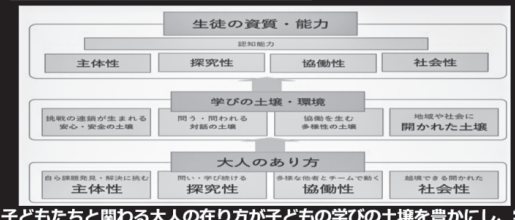
学校組織編成「人が育つ組織づくりを目指して」

② プロジェクトマネージャー（ミドルリーダー）の育成と学校経営の共創

ビジョンの共有と組織の機能化を図っていくため、プロジェクトの核（PM:プロジェクトマネージャー）となる教職員が必要である。学校経営を共創すること、学校運営を任せることを保障しながら、資質・能力の必要性やプロジェクトの具体的取組（教育実践）について教職員や保護者、生徒への説明の機会を設け任せてきた。

② 資質・能力について

資質・能力を育むために重要なこと



子どもたちと関わる大人の在り方が子どもの学びの土壌を豊かにし、学びの土壌が豊かな環境は子どもの資質・能力も育まれる

資質・能力の必要性と育ちのために」PM作成資料



プロジェクトの具体的説明（保護者・生徒へ）

③ カリキュラム・マネジメントの推進とチームミーティング（班会議）  
ア Plan「計画」～Do「実践」まで



絆づくり班会議（左）・学びづくり班会議（右）

人が育つ組織づくりを目指し、「絆づくり班」「学びづくり班」を設置、それぞれ「絆づくりプロジェクト」「学びづくりプロジェクト」の2つのプロジェクトを推進している。プロジェクトの具体については、教育活動の充実を図るため、要項の検討から立案まで、教職員間で協議を行い、アイデアを出す中で、教職員の学校運営への参画意識と主体性や実践力の向上に繋げている。

イ Check「評価」～Action「改善」

学校評価（7月）中の前述したプロジェクトに関連する評価項目については、結果を踏まえた考察を2つの班それぞれで行っている。それぞれのプロジェクトの成果・課題・改善策をまとめ、2学期始業前の職員会議で全教職員で共有、2学期以降の実践につなげ学校改善を目指している。

④ カリキュラム・マネジメントへの校長としてのフィードバック

チームミーティング（班会議）の内容については、毎週金の運営委員会で報告を受け、必要に応じて助言を行うようにしている。

また、カリキュラム・マネジメントの実践ということで、毎週1回「週報」を発行し、日々の教育実践に着目し、その工夫点や効果性等について価値付けを行い、称賛するようにしている。それによって、教職員が学校運営に携わることへの意欲の喚起に繋がることを期待している。



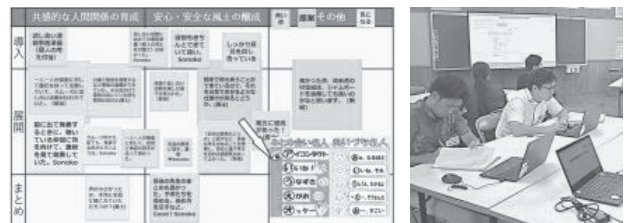
校長週報「カリマネ実践」

【宮古市立上野中学校】

(1) 多様化した教育課題に対応する教職員の専門性と指導力を発揮する研修や学校運営の在り方「教職員の資質能力の向上」

① ICTを活用した校内研修（ワークショップ）の推進

本校では、「学びに向かう力を育む」を校内研究テーマとし、研究主任と学力向上推進担当（授業改善アドバイザー）を中心に研究を進め、各学期に1回、研究授業とワークショップ型授業研究会を計画している。（第1回は、6月に実施）今年度は、学力向上推進担当教諭の提案でワークショップ型授業研究会の中で参加教諭全員がGoogle jamboard（オンラインホワイトボード）を活用し、教職員のICT活用能力の育成に繋げている。



Google jamboard

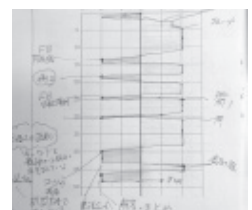
ICT活用ワークショップ

② 自己申告授業の実施と管理職によるフィードバックの工夫（校長としての関わり）

授業観察において校長（ICT活用と生徒観察等）の視点と教頭の視点（主体的・対話的等）を分担することで、効率的で偏りのないフィードバックを実施し質的授業改善及び指導力向上に役立てている。



校長の授業観察



教頭のフィードバック資料

③ 発達支援アドバイザーによる特別支援教育研究会（校長としての関わり）

学習面又は行動面で著しい困難を示す生徒への対応方法について、発達支援アドバイザー派遣プログラムを活用し、専門家による対象生徒の観察及び教員へのフィードバックを行うことで、発達に関する専門知識と効果的な支援方法等について学ぶことができた。今後も継続して派遣要請を行い知識の深化を図り専門性を高めていく。



フィードバック



対象生徒観察

(2) 学校運営に積極的に参画する教職員の育成について「チーム学校としての組織力の向上」

① 人事評価を活用した人材育成（校長としての関わり）

当初面談を実施するにあたり、経験年数に応じて基礎期・発展期・指導期毎に資質能力評価の着眼点が違うことに触れ、若手教員やベテラン教員が職務遂行上求められる能力及び行動等について改めて確認した。

教職員の資質能力の向上を図るとともに学校経営（運営）に積極的に参画するための意識付けを図っている。

評価項目及び行動	評価観点	
	基礎期	発展期
1. 教育活動への参画	<p>【基礎期】</p> <p>学校の経営活動に積極的に関わっている。</p> <p>【発展期】</p> <p>管理職や主任等の指導業務を受けながら、担当する仕事を主体的に遂行する。</p>	<p>【基礎期】</p> <p>学校の経営活動に積極的に関わっている。</p> <p>【発展期】</p> <p>学校経営目標の達成に向け、学校全体を牽引した活動が課題解決に結びつく。</p>
2. 研修・連携	<p>【基礎期】</p> <p>研修や連携活動で自己成長を図る。</p> <p>【発展期】</p> <p>管理職や主任等が学校経営に貢献する立場で研修活動に参加し、連携活動に積極的に取り組む。</p>	<p>【基礎期】</p> <p>管理職や主任等が学校経営に貢献する立場で研修活動に参加し、連携活動に積極的に取り組む。</p> <p>【発展期】</p> <p>管理職や主任等が学校経営に貢献する立場で研修活動に参加し、連携活動に積極的に取り組む。</p>

評価システム 資質能力評価（一部抜粋）

② 学校マネジメントシートの活用

学校長及び担当教職員は、学校マネジメントシート（年2回の学校評価の成果と課題、次年度の重点実践事項・目標、方針等）を活用した上で、次年度の教育計画を作成する。学校マネジメントシートを活用することで教職員一人一人の学校運営に対する参画意識を高め改善を図る。（R-PDCAサイクルの確立）。

学校経営計画	達成状況	達成率
1. 教育活動と世界の協働活動を推進し、グローバル人材を育成している。	100%	300%
2. 1に基いた教育実践が実施され、マネジメントシート（年2回）に基いた改善活動が実施されている。	100%	300%

学校マネジメントシート

③ 育成すべき資質能力を軸とした教科等横断的指導計画の作成

育成すべき資質能力の実現に向けて必要な指導内容を各教科担当が教科等横断的な視点で組み立てていくことで、それぞれのつながりを意識して俯瞰的に捉え、組織的・計画的に教育活動の質の向上を図っている。

育成すべき資質能力を軸とした教科等横断的指導計画

5 成果（○）と課題（■）

- 「資質・能力の育成」「ICTの活用」「特別支援教育の充実」を図る上で、教職員の資質向上を意図した校内研やフィードバックを実施することができた。
- 組織の機能化とカリキュラム・マネジメントを推進する中で、学校経営（運営）に積極的に参画する教職員が育ってきた。
- 教職員の資質向上のための研修時間（校内）、フィードバックの時間確保。
- チーム学校としての目指す方向性（ゴール）と実践事項を年間を通して意識することと、教職員間における日常的実践の差の縮小。

## 第6分科会

## 研究主題

地域や専門機関との連携・協働による「チーム学校」の実現とその機能強化

提案者：鹿川 義晃（中城中学校）  
 司会者：照屋 心一郎（北中城中学校）  
 ”：上里 厚（コザ中学校）  
 記録者：仲村 リリア（越来中学校）  
 ブロック共同研究者：多和田 勝（山内中学校）  
 運営委員：大田 守利（伊平屋中学校）

## 1 はじめに

コロナ禍を経験し、学校では予測不可能な複雑化・多様化した教育課題の解決に向け、生徒の豊かな学びを実現するために、地域や専門機関との連携・協働やSC・SSWや各支援員、部活動指導員など教員以外の専門性をもつ多様な人材と積極的に協働する体制をつくることが求められている。

また、学校においては「チーム学校」の実現に向け、学校長のエージェンシーを発揮した学校経営のもと、教職員の資質・能力を向上させ、チームとしての組織力を高める取り組みが必要である。

## 2 主題設定の理由

はじめに述べたように、複雑化・多様化した学校課題に対し、生徒の豊かな学びを実現するためには、学校と地域が連携・協働する「チーム学校」の構築や機能強化が必要である。そこで、本ブロックでは主題を「地域や専門機関との連携・協働による『チーム学校』の実現とその機能強化」とした。

## 3 研究の視点

- (1) 地域や専門機関との連携・協働
- (2) 「チーム学校」としての組織力を高める取組
- (3) 「チーム学校」実現への学校長の関わり

## 4 研究の実際

- (1) 越来中学校（生徒数200名）

## ① 地域や専門機関との連携・協働

## ア 小中連携教育の推進

本校は、市指定を受け越来小中校区の地域・保護者と協力・連携のもと、知・徳・体の育成と学校課題の改善を目指し、小中連携教育を実施している。

## ・小中連携学力向上推進の取組

年4回相互授業、学習規律、生徒指導等の共通実践を行っている

## イ 地域との連携

## ・小中合同学校運営協議会の実施

年4回の学校運営協議会の1.4回目を小中合同で実施している。

## ・保護者・地域・関係機関との意見交換会

校区小・中学校のコーディネーターと連携し、小中合同で交通安全見守り隊、民生委員意見交換会等を実施。また、授業参観日と抱き合わせて実施している自治会や保護者とのゆんたく会で、学校理解の機会を持っている。

## ・地域・保護者からの協力

技術・美術・家庭科実習ボランティア、保護者のみの美化作業、読み聞かせ、部活動外部コーチ等の協力がある。



地域授業ボランティア(技術実習) 地域授業ボランティア(調理実習)

## ② 「チーム学校」としての組織力を高める取組

本校では、「共通理解」「共通実践」「同僚性」を常に意識・確認しながら進めていくことで「チーム学校」の組織力を高める取組を進めている。

## ア 学力向上推進の取組

本校独自で「R5越来中学校学力向上プロジェクト」を作成し共通実践している。

## イ 不登校改善の取組

電話や家庭訪問でも連絡が取りづらい不登校生徒の家庭への改善の策として、SSW、市役所、青少年センター等の関係機関との連携を積極的に取り組んでいる。

## ③ 「チーム学校」実現への学校長の関わり

学校以外の専門性を持つ機関と連携・協働し、それぞれの専門性を発揮していくことで学校目標の実現に向かっていくため、学校長として以下の点に取り組んだ。

## ア 学校理解に繋げる情報発信

・HP、スクリレ、各種便り等で学校の取組の情報発信を全職員で取り組むことで信頼される学校を目指す。

イ 地域・関係機関との連携

- ・小中の地域コーディネーターと共に学校への応援者を教諭とつなぎ、管理職だけでなく、授業ボランティアや行事応援などで地域とかわる職員を増やす。
- ・不登校改善の対策に向け、役割分担を明確にし、関係機関ともに対応する。

(2) コザ中学校（生徒数398名）

① 地域や専門機関との連携・協働

本校は、30日以上不登校生徒と学校・学級不応答が大きな課題である。その課題解決のために以下のチーム体制を構築した。

ア 生徒指導部会・教育相談部会での情報交換で確実な行動連携につなげるため、SCやSSW、こども相談・健康課等、関係機関等とどのように繋げていくか協議し、部会の充実を図っている。（家庭教育力の弱さが令和4年度の重点課題で、こども相談・健康課との連携強化を図る）

イ 全職員を校区内各自治会担当に割り当て、各学年の総合的な学習の時間を活用し、地域学習を通して、地域活動への積極的な参加を促している。

② 「チーム学校」としての組織力を高める取組

本校の課題である学力向上を推進するため研究主任・学推担当を中心とした校内研修・教科会の充実に取り組んでいる。

ア 公開授業：年間で1人2回実施。1回目（5～9月）、2回目（10～1月）。授業プランシートを作成し全職員へ配布。教科を中心とした全職員で授業観察を実施。授業後は、授業リフレクションを実施し振り返り、授業改善に活かす。



5年研を兼ねた音楽の公開授業（ICT機器の活用）

イ 教科会を週時程に位置づけ、「教科会ファイル」に話し合った内容を記録する。ファイルは、校長・教頭で確認をし、コメント記入後、フィードバックする。（管理職適宜参加）

ウ 道徳授業の充実：担任同士による「ローテーション授業」の実施。指導案作成を担任会で行う。相互授業参観を行うことで情報共有し、学級間差の解消につなげる。

③ 「チーム学校」実現への学校長の関わり

ア 管理職による授業観察を毎日行い、その日の

うちにリフレクションの時間をとり、フィードバックしている。

イ 新型コロナの影響で、地域貢献の活動（地域生徒会等）が制限されていた。今後の状況をみながら、地域との連携をできることから校長と自治会長が連携を図り推進していく。

(3) 山内中学校（生徒数493名）

生徒の置かれた環境、そして一人一人の特性や価値観も年々多様化が進み、学校に求められる役割は急激に変化してきたが、肝心なことは多様化を理解し、変化に迅速に対応できる組織体制を整え、教育活動を展開していくことだと考える。

① 地域や専門機関との連携・協働

ア 沖縄市型コミュニティスクールの推進

コロナ禍の影響をうけ活動が制限されてきた学校運営協議会等の活性化を図るため、年4回の協議会を充実させる。そのために、職員に対しては、学校の良き理解者を増やすという目的を明確化し、保護者や地域関係者に対しては、学校教育活動への参画意識を高める活動に取り組みさせる。

さらに、地域コーディネーターを学校の情報発信源として効果的に活用し、ボランティア活動等を推進し、地域に開かれた魅力ある学校づくりに取り組む。

イ 優位性を生かした専門機関との連携強化

様々な課題や困り感をかかえた生徒支援の充実のために、関係機関との連携強化は必須である。今年度、校区内にある沖縄市青少年センターに本校の職員が指導主事として着任した。学校の職員や保護者、生徒をよく知り、密な連携が可能という優位性を生かした生徒支援を強化するだけでなく、今後の組織体制や関わり方等の改善にも繋げたい。

ウ 地域伝統行事「風山祭」の活用

地域の活性化と青少年の健全育成を目的とした「風山祭」が4年ぶりに開催され、本校を会場に地域の伝統文化の継承と親睦が図られる。特に学校と青年会との関わりが多くなることを活かし、学校の協力者としての関係づくりに取り組む。



校舎をバックに勇壮な演舞を披露する青年会

オープニング演奏で風山祭を盛り上げる吹奏楽部

## ② 「チーム学校」組織力を高める取組

## ア 信頼関係を築くキーワードの共通確認

年度当初の職員会議においてキーワード等の共通確認を行った。

## イ スタートアップ週間の取組

4月と5月連休明けの一週間をスタートアップ週間と位置づけ、担任と副担任が協力して教室レイアウトや係活動の運用状況、キャリアノートの点検等を行う。

さらに朝の会、帰りの会等も2人体制で実施し、活動状況をマネジメントする。

## ③ 「チーム学校」実現への学校長の関わり

## ア 「サーバント・リーダーシップ」の手法

主な視点が「教職員の幸福度を高めることで子どもの幸福度を高める」というマネジメント手法で、教職員が働きやすい環境を整えるということだが、子ども達の成長をしっかりと支援できているかということをも第一の視点とした。

## イ 学校長の思惑

魅力ある職場造りや「働き方改革」は自分たちの知恵で作り出していくことを基本とし心理的安全性確保のため校長は常に機嫌良くどこか呑気に見せることを心情とした。

## (4) 北中城中学校（生徒数527名）

## ① 地域や専門機関との連携・協働

本村は、「わたたーわらばーたーわたたー学校」を合い言葉に、村ぐるみで子育てに取り組む「かかわり宣言」を発表しており、村役場や村教委などの公的機関から、直接的・間接的な支援に恵まれている。それらを最大限活用し諸連携・協働に取り組んでいる。

## ア 幼小中連携（村教育委員会直接的支援）

村教育委員会により一幼、二小、一中による幼小中連携が進められ、全教諭が次の6部会に別れ、年間を通して幼小中の共通課題の改善に



村学推幼小中連携部会

- ・学習指導部会
- ・道徳教育部会
- ・生徒指導教育相談部会
- ・特別支援教育部会
- ・キャリア教育部会
- ・特別活動部会

## イ 地域連携（村役場間接的支援）

本村には、村企画振興課が主催する「北中城

村グッジョブ地域連携協議会」が設置され委託運業者のコーディネートにより、北中城村型キャリア教育推進がされている。本校では職場体験学習に係る下記の取組みへの支援が行われている。



村グッジョブ地域連携協議会

## ・職場体験学習（1学年）に係る取組み

校内ハローワーク事前学習、校内ハローワーク、マナー学習、職場体験学習、職場体験学習発表会

## ウ 地域連携（村教育委員会間接的支援）

本村教育委員会生涯学習課には、地域学校協働本部事業を担う各学校担当のコーディネーターがおり、学校のニーズにより地域人材等のコーディネートが活発に行われている。



高校入試模擬面接

・「地域情報誌作成～地域のことを教えてもらおう～」(各自治会長等)

・個別の学習支援（地域学生等ボランティア）

・読み聞かせ（読み聞かせサークル）

・栽培指導（地域ボランティア）

・高校入試面接講座（役場管理職、地域企業人事担当者等）

・バスの運転「コンクール等への生徒送迎」（地域ボランティア）

## ② 「チーム学校」としての組織力を高める取組

## ア ベクトルを揃える

・学校経営方針、校長だより、評価面談

## イ 同僚性・協同性を高める共通実践

・教科横断型視点による校内研修「キャリア教育の視点を活かした授業改善」（学校）

・公開授業に向けた授業づくり（教科部会）

・道徳ローテーション授業（学年）

## ウ 成果と課題の共有

・学校評価、授業観察、コミュニケーション

## エ 専門的人材の活用

・生徒指導部会、教育相談部会、特別支援教育部会へのSSW・村教育相談員の活用

## ③ 「チーム学校」実現への学校長の関わり

チーム学校を作るうえで、次の三つの視点、特に「教職員の業務改善・働き方改革の推進」の視点で、学校経営・運営における連携のニーズを吟味し連携・協働の働きかけに取り組んでいる。



- ア 学校内外の多様な人材・専門性の活用
- イ 子ども達に必要な資質・能力を確実に身に付けさせる細やかな教育活動の推進
- ウ 教職員の業務改善・働き方改革の推進

(5) 中城中学校（生徒数543名）

① 地域や専門機関との連携・協働

ア 村平和学習事業として全学年が総合的な学習の時間において村内、本島中部・南部における戦跡地巡りをする際、村内団体が戦跡ガイドを務めるなどし、地域人材を活用している。



イ 地域コーディネーターを介した地元農家による農産物の地産地消などの紹介も生徒の食への関心を高めた。

ウ 不登校生徒の登校支援及び居場所づくりのため教育相談部会にSCやSSWも加わる。SSWは村役場の福祉課や子ども家庭課との連携や、県若者相談窓口、就労支援団体等と学校・保護者をつなぐ重要な役割を果たしている。

② 「チーム学校」組織力を高める取組

ア 本校は今年度からの2年間を道徳教育に関する校内研修を充実させる計画がある。昨年度はローテーション授業も実施したが、各教師が毎週実践する道徳科の授業づくりを充実させることが必須であることから、各学年単位で毎週月曜日の放課後に授業づくりのための道徳会を開催している。道徳解説書等に目を通して指導内容や授業展開、発問について協議している。授業後は教師の振り返りを蓄積し、次の授業づくりに生かせるようにしている。



イ 確かな学力の育成に向けて生徒が計画的に家庭学習を進めるなどの自己調整力を鍛えるため、全学年で市販ダイアリーを利用している。これには学校行事を記録する他、各テストの実施日や各教科の宿題内容や提出物等の〆切日、家庭学習時間や内容の記録と日々の振り返りを記入させている。全校体制の取組とするため主旨や運用の仕方を全生徒・職員で確認し、持続可能な取組となることを期待している。



- ③ 「チーム学校」実現への学校長の関わり  
一般的なことではあるが、年間を通して以下のことを大切にして学校経営に邁進したい。
- ◎ 学校経営方針、教職員評価システム（企画）
- 授業参観、生徒会活動・部活動参観（見る）
- 四者会、企画委員会、各部会（聞く）
- 校長講話、校長あいさつ（話す）
- 週案メモ、学校だより（書く）

5 成果と課題

【成果】

- 地域の方による授業ボランティアや、不登校生徒の関係機関との連携で、学校運営の協働体制の構築につながった。（越来中）
- 不適応生徒や不登校生徒の居場所を作ることができた。教員の資質・能力向上と授業改善が推進されている。（コザ中）
- 前期の教職員面談や学校評価において、組織体制について全職員が肯定的な回答である。（山中中）
- 外部専門機関との連携により、教職員の業務改善及び生徒に必要な資質能力を育む教育活動の充実が図られた。（北中城中）
- 各主任等の学校経営への参画意識が高まっており、担任を中心とする全職員で道徳教育に関する研修推進などの機運が高まっている。（中城中）
- 一村一中学校の強みもあって村行政や教育委員会、地域からの協力を得やすく、学校課題解決に向けて学校と関係機関の連携が機能している。（中城中）

【課題】

- コミュニティスクールにおける学校・地域・保護者の協働体制や役割分担等、組織体制づくりが必要である。（越来中）
- 授業改善に向けて、校内研修のさらなる充実を推進する。（コザ中）
- 職員の肯定的な評価が、生徒の成長に着実に繋がっていることの実証を図る。（山中中）
- 教職員や外部専門機関・ボランティア等が、よりチームとして機能できるよう、校長の経営方針の周知や、参画の効果のフィードバックなどを図る必要がある。（北中城中）
- 組織力をさらに向上させるため教職員の意識を向上させ、負担軽減と時間の確保をすすめたい。（中城中）

6 おわりに

本研究により、各校の特色に応じた校長の取り組みをお互いに学び合えたことは大きな収穫である。

各学校の学びを通して、さらなる学校経営の充実を図り、生徒の学力向上やいじめ・不登校の減少に邁進していきたい。